

ごとく、今もその流のなごりなりとて、古川あれど、わづかなる川にて、むかしのさま見るべく  
もなし、このみな上に、ふる隅田川といふ所あれど、その間を新綾瀬川さへぎりて、いとおぼつかなき川なり。

〔東國紀行宗牧〕角田川もみえわたるに○中清閑多田こ、まで數日のをくりも懇切なれば○中  
袖ぬれがはなる氣色なきにしもあらねば、涙もろなる心よわさをまざらはさむとて、

角田川舟こそりはの長刀にあひしらひてぞふりはなれつる、といひつゝ、みやこのかたのみ  
おもひやられて、岸ちかきなるもおぼえず、わたし守におどろかされておりたり、普藏主とて、常  
陸國法雲寺より湯本の長老へ使に参られし僧、小田原にても參會のことなれば、このわたりを  
も、もろともにしつゝ、かたらひ行ば、馬上より宮内卿にいひかけられし、

溟々武野水雲邊、不意逢君棹小船、無限愁情難詰盡、客中送客落花天、と聞もなをもよほされた

〔夫木和歌抄二十四〕寶治二年百首、渡月、

角田川あなかまふねのかぢかくせよわたる月をとゞむばかりに

〔夫木和歌抄二十六〕喜多院入道二品親王家五十首すだの渡

はるぐとすだのかはらをあさゆけばかすめるほどや渡なるらん

正三位季經卿

永久四年八月雲居寺歌合霧

夕霧にすだのわたりはみえねどもふな人よばふ聲きこゆなり

此判者基俊云、左歌すがたはあしうも侍らぬに、すだのわたりとよみたるぞなさけなき心ち  
するにや、これは業平朝臣のいざこととはんとよみて、かれこれかれいひになみだおとす所  
なり、すみだ川の程におりてとぞかけるよし、それに思ひそめて覺るにやあらんと云々、